

所属・資格 哲学科・准教授

申請者氏名 三平 正明

研究課題		主観的文脈の意味論
報告の概要	研究目的 および 研究概要	フレーゲやウィトゲンシュタイン以来、文の意味とは、それが真となる条件、すなわち、真理条件のことだと考えられてきた。これは、現代言語哲学の主流をなす見方である。ところが、この見方は、嗜好や認識様相などを表現する文、一般に主観性を含む文脈には適用しにくい。なぜなら、嗜好などは個人や集団ごとに異なりうるため、そうした文については客観的な真偽を問えないように思われるからである。そこで、今回の研究では、主観的文脈に対しても真理条件的意味論を適用する可能性があるかどうかを考察することが目的である。そのために、真理概念の解明をはかりながら、嗜好の文脈、認識様相の文脈、道徳的文脈といった、具体的な文脈を取り上げて、その意味論的扱いを検討していく。
	研究の結果	嗜好や認識様相などを表現する主観的な文脈の意味論の候補をいくつか検討した。それらは、客観主義、表出（表現）主義、文脈主義、相対主義である。客観主義は、真理条件的意味論を直接的に適用できるという点で優れているものの、嗜好といった現象の主観性をとらえきれていない。表出主義は、嗜好などについては客観的な真偽を問題にすべきでないという人々の直観をすくい取るものの、真理条件的意味論とは全面的に異なるプログラムを要することになる。文脈主義は、真理条件的意味論の枠組を採用できるものの、意見の不一致や撤回という問題を説明しにくい。最後に、相対主義は、文脈主義の困難を克服するように思われるものの、「真理の相対化」という、いわば劇薬を用いており、哲学の伝統的な困難をすべて抱え込む可能性がある。このような形で、さまざまな立場の長所と短所を明らかにすることができた。
	研究の考察・反省	以上の研究結果をもとに、四つの意味論的立場の中では、相対主義が主観的文脈の意味論として一番見込みがあると判断した。そのため、現在、相対主義にまつわる、さまざまな哲学的問題を引き続き考察しているところである。特に、古代ギリシア以来の「相対主義の自己論駁」という問題を取り上げて、相対的真理という概念の解明を図っている。このように、研究が少しずつ展開していることが良かった点であり、その歩みが遅いことが反省点である。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>本年度は、人文科学研究所共同研究費の論文「相対主義的意味論の可能性」（『研究紀要』97号1-30頁）などの執筆に追われてしまい、本研究の成果物を出せなかった。現在、本研究費による論文を執筆中なので、それを来年度に公刊したい。</p>	